

## 報告講演「島根にとどまる若者の意識 —高校生への意識調査から要因を探る—」

石田龍之介



### ○石田龍之介（大阪大学大学院生）

御紹介いただきました大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程2年の石田と申します。本日は発表の機会をいただき、本当にありがとうございます。

では、吉川先生の例に倣って、自己紹介をしていきたいと思います。先ほど御紹介いただきましたとおり、私は島根県の出雲市の出身で、高校3年生まで出雲市で過ごしました。出雲高校を卒業した後に、大阪大学の人間科学部に入学しまして、そのまま大学院人間科学研究科に進学して、今年で6年目、今は博士前期課程2年に在学中です。それで、来年から、厚生労働省のほうに就職が決まりまして、来年から東京で就職するという、先生がおっしゃったような高校の進学流出の流れに乗って、関西の大学に進学して、そのまま関東で仕事を見つけるといふ、県外流出組ということになります。

以上が私の生い立ち紹介となりますけれども、今日は、島根県、それから福井県という2つの県の高校生を対象に行ったアンケート調査を基にお話をしていこうと思います。私はその調査を使って修士論文を吉川先生の指導の下で作成し、先日提出しました。今回はその研究を基に発表を行っていききたいと思います。それで、内容としましては、福井県と比較しながら、島根県の若者の人口流出の特徴について、詳しく述べていきたいと思います。では、よろしくお願ひします。

### 島根県内に残りたい若者とは

まず、こちらのグラフを御覧ください（図3）。これは、令和元年度の学校基本調査の内容から作成したものです。左側の15.7%、これは、島根県の高校を卒業して大学に進学した人のうち、県内の大学に進学した人の割合です。それで、右の図ですけれども、これは、三大都市圏に属する都府県を除いた地方圏、残りの道と県における合計の県内進学率ですね、これは37.1%となっています。これを比較しますと、島根県では、全国的に見ても、かなり多くの若者が県外に流出しているということが分かると思います。そして、島根県の資料によりますと、県外大学に進学した人の中で、県内に就職を行った人、Uターン就職を行った人は26.6%となっています。これも決して高い数字であるとは言えないと思います。したがって、島根県では、他県と比べても、かなりのスピードで若者が県外に流出しているとい

いうことができます。

## 15.7%……島根県の県内大学進学率

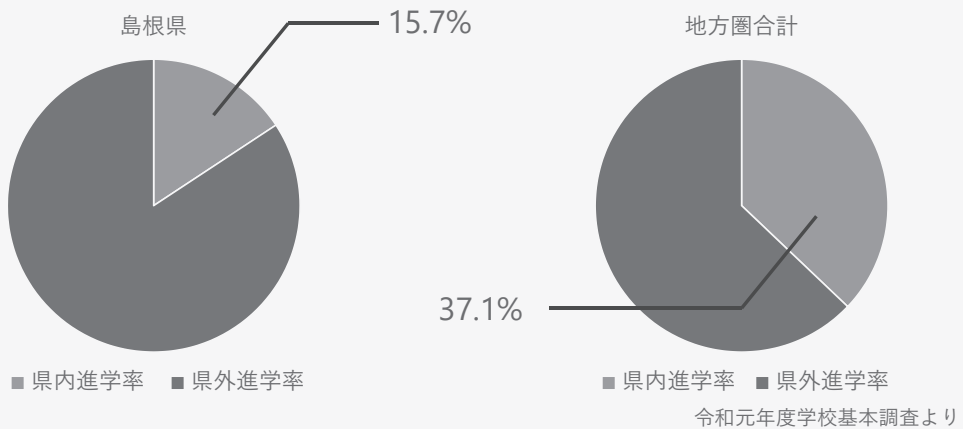


図3

ところで、若者が県外に出ていく理由っていうのは様々あると思います。例えば、県内の大学でカバーできない学部に進学したい場合ですとか、それから大手企業、都市の大企業とか、それから、僕みたいに国家公務員になりたいなど、挙げれば切りがないと思います。

それでは、そういう様々な理由がある中で、県内に残りたいという人はなぜ県内に残ろうと思うのかということを考えていきます。これも細かいことを挙げればいろいろあるとは思いますが、私は、大きく分けて2つ挙げられると考えています。1つが、職業的な理由、そしてもう一つが、家・家族的な理由の2つになります。

まず、職業的な理由ですけれども、これは、地元で就職したい、それから、地元に通き口がある、だから県内に残りたい、県内に残れると考えるものです。これは、もちろん県内の一般企業に勤めたいと考えている場合も当てはまりますけれども、この大きな部分を占めるのが、最近エッセンシャルワーカーとも呼ぶべきような医療職ですとか教育職、それから、地方公務員とかのようなお仕事、地方においても欠かせない仕事となっているようなものを志望している場合になります。これらの職業は、県内で働くことが想像しやすい、一番最初に出てくる職業になると思います。

そして、このような職業に就きたいと考える人は、男性よりも女性により強く当てはまる

とされています。これは、女性のほうが非大都市圏で満足できる労働条件の職業を見つけにくいというような条件的な不利がありまして、相対的に県内エッセンシャルワーカーとして県内に残るという選択肢を取りやすいということが考えられています。

それから、近年の研究では、就きたい職業が定まっていない若者、これを、キャリア意識の低い若者とでも言うのでしょうか、このような人たちも県内で進路を探そうとする傾向が強いというふうに言われています。これは、先ほど吉川先生がおっしゃっていた低成長時代というところも関係してきますけども、都市でも就職をするのは難しい、それならわざわざ県外、大都市に出てお仕事をを見つけなくても、近くで探せばいいんじゃないかと考える人が増えているということにもなります。

また、家・家族的な理由、つまり、家があるから、家族がいるから地元に残るということもよく言われているものだと思います。最も思いつきやすいのは、例えば、長男が家をお墓を継がなきゃいけないから実家に戻らなきゃいけないと考えるようなものだと思います。しかし、このような単純な、家志向的な地元の残留はかなりまれになっていると言えます。むしろ実家で暮らすということで、実家の資源、家とかそういうものを利用することを期待していたりとか、あるいは生活、それから、結婚した後の子育てなどで、祖父母、親からの援助を期待していたりというような理由で県内に残るという形になります。

さて、職業的な理由と、家・家族的な理由の2つのことについて紹介してきましたけれども、ただし、この家・家族的な理由というのは、その土地で就職して、生活できるということができるときのみ成り立つと考えられています。

それでは、ちょっとここで話を戻して、島根県で県内に残る若者が少ない理由というものを考えてみたいと思います。

まず、考えられるのが、他県に比べて島根県の若者は県内に残りたいと考える人が少ないのではないかということです。誰も残りたいと考えなければ流出が多くなりますけれども、島根県はそうだから県内に残る若者が少ないのでしょうか。それから、残りたいと考える人はほかの県と同じくらいいるけれども、県内にはそれに耐え得るような受皿が存在しない。だから、仕方なくあふれていって、外に出ていってしまうのではないかということです。それとも、そもそも先ほど示したような、一般的な地方における県内に残る人の条件というのが島根県では当てはまらないのではないかということも考えられます。このような、疑問に答える形でちょっとお話を進めていきたいと思っています。

## 島根県・福井県の高校生調査

それでは、今回の本題である分析に入っていこうと思います。アンケートの概要ということでちょっと説明していきたいと思います。今回、私が修士論文でも用いたデータなんですけども、今から大体3年前、2018年の年末頃、高校3年生、それから補習科の方に対して行った、将来像についての調査、5年後の自分へのメッセージというアンケート調査を集計したものです。集計表に不備があるなどして使えないものを除いて、島根県では777ケース、これを有効なものとして分析に用いました。この分析で対象となった学校は、松江の3校、北、南、東ですね。そして、出雲、大田、浜田、益田というような、県内でも進学校とされている合計7校について対象にして行いました。したがって、これは進学校に通っている生徒の意識を捉えたものになっていると考えてください。それから、これと比較対象となるケースとして、福井県ですね、先ほどの先生の話でもちょっと出てきましたけれども、面積がそこまで広くなく、典型的な地方県と考えられるようなケースですね。こちらも同様に、普通科系の高校10校に対して、合計1,418ケースを用いて分析を行いました。

では、ここで、簡単に、福井県の特徴を紹介していきたいと思います。県内の進学率は、島根県の倍の30.3%です。島根県が15.7%という、大体2倍ぐらいになりますね。そして、地方圏の平均ともあまり変わらないと言えます。また、新卒Uターンの割合は、平成31年で28.8%の、こちらは島根県とあまり差はありません。ただ、年々かなり伸びているという状況です。また、県内の進学者が多いということですが、これは単純に、県内の大学定員が多いからなのと言われると、実はそういうわけではなく、そこはあまり変わりません。ただ、選択肢がかなり多くなっています。具体的には、国立大学1校、公立大学2校に加えて、私立大学が3つあって、島根県と比べて偏差値的にも、選択肢がもっと広がっているというふうに言うことができると思います。

それでは、両県の結果を比較していきます。まず、県内進学を希望している人が少ないから外にいっぱい出ていくんじゃないかという疑問に対して答えるのがこの図になっています(図4)。見ていただくと分かりますとおり、島根県と福井県でそこまで大きな差はありません。若干、男子のほうで福井県より島根県のほうが県内進学少ないかなというふうに見えるかもしれませんが、それでも、進学率に倍ほどの差があるということを説明するほどの差にはなっていません。もちろん、調査対象が限られているから、ほかの学校の差がそこに入ってくるんじゃないかという考え方もありますけれども、少なくともこの調査からは、島根県のほうが県内に残りたい人が少ないから県外にたくさん出ていくのだということを言うことはできない、ということですね。

## 県内進学したい人が少ない……わけではない

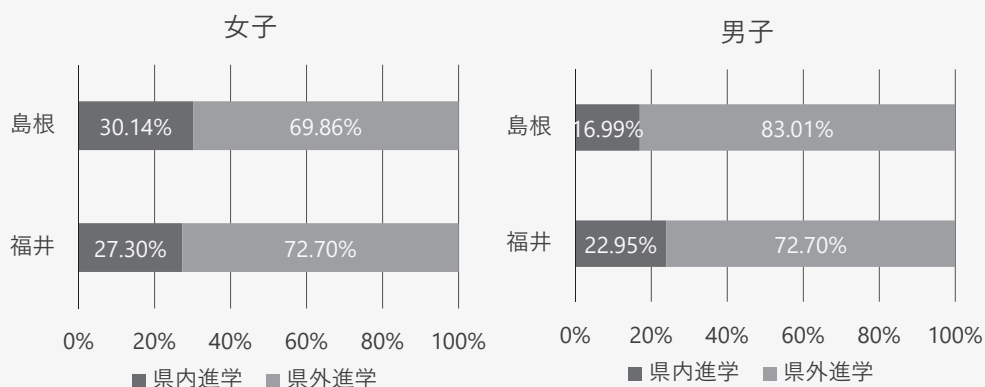


図4

### 島根の高校生は将来の職業で移住・定住を考える傾向

それでは、ここから、細かい分析を行って分かった結果について、幾つかまとめたものを調べていきたいと思います。私は、まず、福井県と島根県で差がどのあたりにあるのかなということ考えたときに、見つけたのが、親との同居意識と就職に関する意識の関係。それから、職業が定まっていない、職業が未定な生徒の進路に関するものです。

まず、親との同居意識と就職に関する意識の関係について見ていきましょう。これが島根県の結果になります。島根県の職業未定の生徒は親との別居を考えやすいということ、そして職業をちゃんと考えている生徒は、親と暮らすことを考えやすいということが分かりました。先ほど述べたとおり、親との同居というのは地元で暮らすための大きな要因となるものではありますけれども、島根県の場合、就きたい職業が定まっていない、つまり、職業定まってないけど、これから考えようかなと考えているような生徒の場合は、それが決まっている場合に比べて、親と一緒に暮らしていると考える割合が低くて、そのような選択肢を取りづらいということが分かりました。そしてこれは、高校3年生のときに職業をきめているかどうか、ということについての結果になります。そこはちょっと強調させていただきます(図5)。

## 島根：職業未定の生徒は親との別居を考えやすい

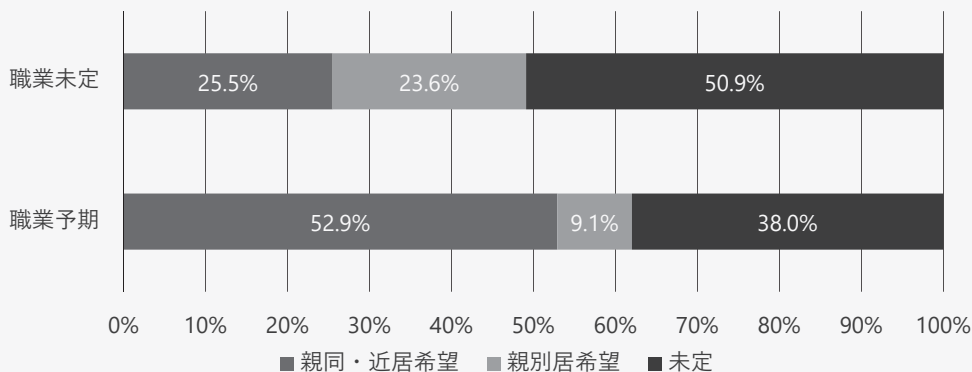


図5

そしてこれについては、男子も女子も同じような結果が見られました。それで、島根県のだけ見てもちょっと分からないので、福井県のほうを映します（図6）。見ていただいて分かりますとおり、福井県では、職業未定でも職業予期でも、そこまで大きな差がない。下のほう、職業予期者のほうがやはり同居希望が多くなりますけれども、別居希望も多くなっていて、未定が増えた分だけちょっとずれただけかなっていうふうになると思います。それから、島根県と比べてみますと、どちらにしても、親と同居するということは、実家に帰ろうって考えている人が島根県には少ないということが言えると思います。

つまり、島根県では、特に、実家志向と、それから、就く職業が高校を卒業する時点で決まっているかどうかということがより深くつながっているということが言えます。

そして、職業未定、キャリア意識が低いという言い方もできますけれども、その生徒が県内に残りたいと考える割合も、福井県と比べて、かなり小さいということが確認できました。先ほど私は全国的な傾向として、職業が決まっていない、キャリア意識の低い若者は地元就職を希望する、そういう傾向にあると言いました。けれども、島根県では、そのような傾向が確認できないということです。言い換えれば、ほかの地域では可能であるような、若者が、職業は決まってないけど地元に戻ろうかなと考えられるような、そういう経路が1つ潰されているということです。

そのほかにも様々な特徴があります。まず、島根県ですけれども、長男、長女ということ

## 参考：福井県

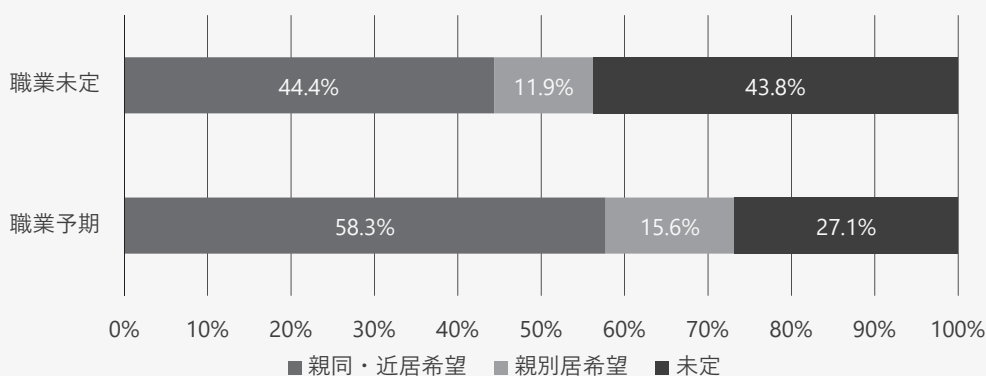


図6

であっても、そうでない生徒と比べて県内に残りやすいというわけではない。福井県では、長男だったら、あるいは長女だったら実家に帰ろうというふうに考える人も多いんですけども、鳥根県ではそういう効果が確認できませんでした。つまり、鳥根県では、自身の就きたい職業がしっかり定まってる若者でなければ、たとえ長男であろうと、長女であろうと、実家に残ることができないと思ってしまっているのではないかと考えられます。

そして、そのような家・家族的な理由での地元志向というのが弱い一方で、鳥根県では、女性だけでなく男性も県内エッセンシャルワーカー、このような職業の志望者が、県内進学、県内定住を希望する、県内に残り続ける傾向があることが分かりました。一般的に女性のほうが男性よりも強く見られるということで最初にお話ししましたが、鳥根県ではそのような差がありません。なぜか。それは、鳥根県ではやはり職業的な理由での県内残留が男女ともに強い効果を持っているということが理由となっています。そして、それが男女ともに強いということはもう一つ特徴的なものを示してしまっていて、県内エッセンシャルワーカーの中でも地方公務員志望の生徒というのが、県内進学を志望するような効果が確認できなくなりました。これは、鳥根県の女子だと、そうですね、鳥根県の女子とエッセンシャルワーカーに、地方公務員を志望している男子が県内で競合しあって、その結果として、女子が外に出されてしまっているのではないかと考えることができます。

それでは、鳥根県の若者の県内に残る割合が少ない理由として、行った分析をまとめると、



このようなことが言えると思います。つまり、鳥根県では県内に残るために覚悟が求められることになると思います。鳥根県では大学の選択肢が少ないということ。そして、エッセンシャルワーカーではない就職先のことを若者は認識できていないのではないかとすることは考えられます。このような、若者が自覚している県内にとどまるための受皿の大きさ、居場所の多さというのを若者収容力と呼ぶことにしますが、これが小さいために、ほかの地域では見られる本来あるべき地元残留の経路を通りづらくなってしまっているということが言えます。つまり、鳥根県では、ほかの地域では当てはまる県内に残る人の条件というものの中に、一部当てはまらないものがあるということが言えると思います。

そして、県内で就職できるような職業を志望しているということ、それが唯一の大きな、県内に残留できる大きな通り道となってしまう、そうでない若者は、県内で仕事を探せばいいというような考え方を持つ余裕もなく県外に押し出されてしまっているということになります。そして、先ほど言ったとおり、地方公務員志望の女子が特別県内進学を希望しない、県外に出るかもしれないということになってしまうのは、エッセンシャルワーカーの争奪戦に多くの男子も参加してしまうために、男子もですけれども、女子もはじかれてしまっているという状況が考えられるようになります。

## 県内残留モデル

ここまでで分析を行いましたけれども、それを基に鳥根県の県内残留のモデル図っていうのをちょっと作ってみました。このような図を描けるようになると思います（図7）。

ちょっと詳しく見ていきますね。これは鳥根県の男子に関する図になります。鳥根県では、左下の若者収容力、これがちょっと鍵になってくる概念なんですけども、これが小さいために職業未定の人が地元に残ろうとする流れが強くありません。そして、長子であることが家・家族的な理由の地元残留につながることもありません。一方で、県内でエッセンシャルワーカーを志望している場合には地元残留を考えやすくなります。そして、自身が就く職業が決まっていて、それが県内で就職するものであれば、まだ実家志向につながることもあり、地元残留を持つという経路はある程度考えられるようになります。つまり、何度も繰り返しますが、鳥根県では職業が決まっているかどうかというのが最も重要です。それが満たされない限り、それ以外の経路を取ることは難しいと言わざるを得ません。

これが福井県ではどうでしょうか。これは、鳥根県と違って福井県では若者の収容力というのがそれなりにあります（図8）。ですので、職業未定であっても県内に残ることができます。そして、長子であるというような、ちょっとなかなか見られないような理由でも、実



## 島根県男子の県内残留のモデル図

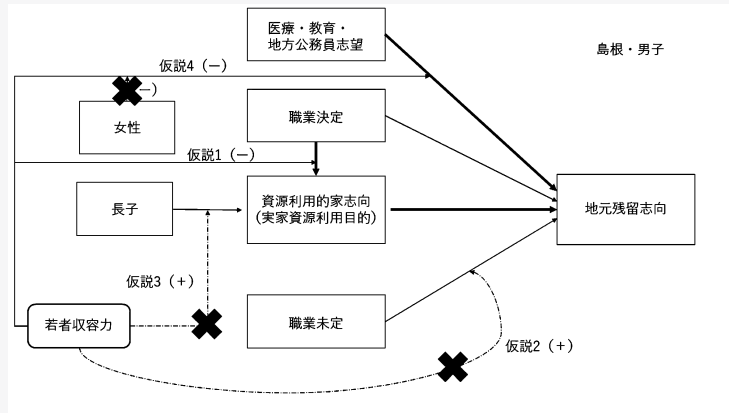


図 7

## 参考：福井県男子の県内残留のモデル図

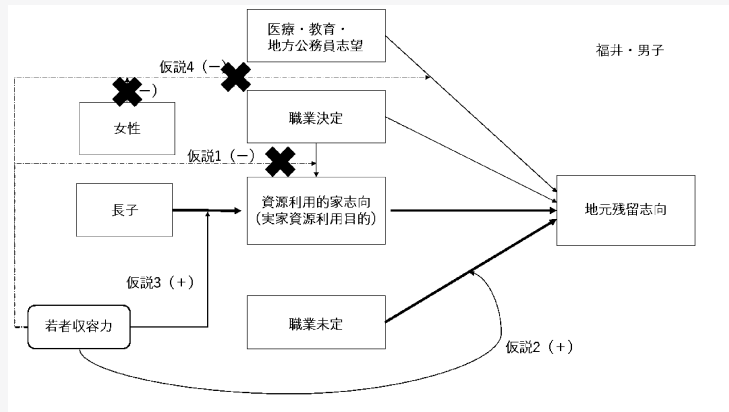


図 8

家志向につながって地元に残りやすいというような経路もたどることもできます。県内エッセンシャルワーカーになって県内に残るといのは、あまり強い線では引いていませんけれども、これは、それ以外の経路が十分太いので、わざわざここを強調する理由もないという

ことで太くならないということになります。鳥根県と比べますと、かなり選択肢とか、余裕とか、そういうところがかなり大きいと言えるでしょう。

それでは、女子についても確認していきます（図9）。

## 鳥根県女子の県内残留のモデル図

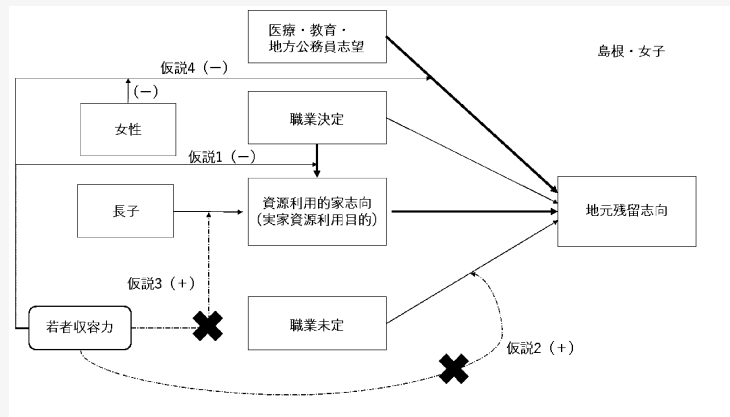


図9

鳥根県女子は男子とあまりモデル上は差異がありません。職業未定の人は地元に残りづらく、そして、長子であるということも残る効果がありません。そして、県内のエッセンシャルワーカーは県内に残りやすくなる。これも同じです。ただし、先ほども言ったとおり、この部分は男子との椅子取りゲームが始まってしまいますので、ちょっとここで競合する場合は、かなり県内に残りづらくなるということがあります。もともと県内に残るための選択肢ってというのが、先ほども言いましたとおり、女子ではあまり多くないという不利があるということがありますけれども、さらに、この部分も競合が発生してしまう場合、流出がかなり加速してしまっている。実際、加速しているのではないかと思います。

それでは、参考として福井県の女子のモデル図についても確認していきたいと思います（図10）。福井県の女子も男子とあまり変わらず、職業未定の人が県内に残ることもできます。そして、県内エッセンシャルワーカーの椅子取りゲームというのも鳥根県ほど激しくないため、ここも選択肢として取ることができる。かなり選択肢が豊富にある県であるということができると思います。

## 参考：福井県女子の県内残留のモデル図

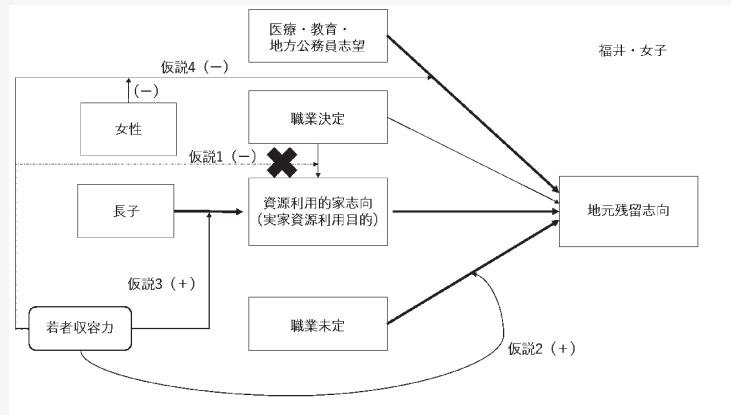


図 10

### 島根に残るということに覚悟が求められすぎるのではないか

以上のような、モデル図などで説明した上で、もう一回、島根県の問題について確認していきたいと思います。まず、県内で就職できる具体的な職業を考えられない生徒を県内にとどめておけないということが最も大きな問題となります。これは、県内の生活を成り立たせるために必要な人材につく最低限の人員は確保できるということは言えますけども、そうでない人たちは外に出ていってしまうということになります。学校の先生とか、それから医療従事者とかは残っていても、でも、それだけでは生活とか社会とかは成り立ちませんので、もちろんこれも衰退していく原因になっていくと思われれます。

また、県内に戻ってこようと考えている若者を企業が採用しようと思う、あるいは、県が企業に採用してもらおうと考えていても、もう既に高校卒業のときに仕事を決めているような生徒でない限りは、もう県内に残らない、県内に戻ってくることを諦めてしまっているというような可能性も大きいと考えられます。また、そのような中で、県内エッセンシャルワーカーの枠は決して大きくはない。そして、それで、椅子取りゲームで敗れてしまった人は、せっかく県内で働こうと考えていたとしても、結局、外へ押し出されてしまっているのではないかとということも起こり得ます。

そして、進学先の選択肢の少なさも問題の一つとなっているというふうに言えます。県内進学を目指す生徒というのが、大抵県内の就職を目指しますがけれども、島根県内にある大学の

選択肢は、僅か2校です。そして、どちらも誰でも入れる大学というわけではありません。そのような選択肢の狭さというのも覚悟を迫る一つの要因となっていますけれども、そこに入れずほかの県に進学して、結局、最初はそういうつもりではなかったかもしれないけど、地元に戻ってこないということもあり得ると思います。あるいは、その競争から避けるために県外進学を選んだり、逆により上位の大学に入れるんじゃないかと先生方に言われて、上位の大学を受験させられたりなど、県外流出に向けて背中を押されるというようなこともあると思います。つまり、島根県から多くの若者が流出している原因というのは、若者がそれを望んでいないからというわけではなく、県内に残るために若者に覚悟を求める一方で、その受皿となるような選択肢も限られているという状況があるということになります。

それでは、結論を述べていきます。若者が出ていくのは、受け入れる場が少ないということのももちろんありますけれども、若者が県内に残るために、選択肢に遊びが少ないということが要因と言うことができます。受け入れる場ということを考えてときに、地元では本当に必要な人員だけを必要な量だけの分しかないということになっていて、まずは地元を受け入れて、そこから仕事探せばいいよという余裕を見せられていないというところです。

そして、県内就職の選択肢を高校卒業のときに思いつけないときには、県内に残ることを、Uターンも含めて諦めてしまう。その上に、県外で活躍するということが素晴らしいこととされているような現状では、県外に出ていくということは止められないようになっているということが考えられます。

つまり、そして、高校については、進学実績を上げるためのキャリア教育によって、より上位の大学進路を遂行させる一方で、県内で活躍することを目指せる環境というのが十分整ってないのではないかと考えられます。

ということで、私の発表は以上になります。ありがとうございました。(拍手)

## ○田中

石田さん、どうもありがとうございました。

次は、島根大学法文学部教授、片岡佳美先生に「親たちの子どもへの思いと、それがもたらす現実」と題して御報告いただきます。

片岡先生は、家族社会学が専門で、京都市の御出身ですが、島根に移住して21年、その間、島根県の家族や教育などに関連する多くの研究を蓄積してこられました。

では、片岡先生、お願いします。